

津島佑子, 『ジャッカ・ドフニ 海の記憶の物語』 論 – マイノリティの友情と共生のポリフォニー

曹榮峻*

I. はじめに

国際的な協力と交流が重要なテーマとなっているグローバル時代を迎えているが、政治的な利益関係において各国は先鋭的な対立を成しており、葛藤の障壁は高くなるばかりである。その狭間で保護されない難民などのマイノリティの人権問題が浮上している。日本でも多文化共生の旗印を掲げながらも、一方ではネオナショナリズムの動きが強化されている。このような時代的狀況の下で注目すべき文学作品として、本稿のメインテキストである津島佑子の『ジャッカ・ドフニ 海の記憶の物語』¹⁾を挙げたい。

* 名古屋大学 人文学研究科 博士後期課程

1) 津島佑子 (2016a). ジャッカ・ドフニ 海の記憶の物語. 東京: 集英社. (以下、『ジャッカ・ドフニ』と略称する。)

津島の最後期の作品である長編小説『ジャッカ・ドフニ』は、アイヌの血を持つ主人公の造形と共にアイヌの言葉と歌がテキストに含まれていることと、近世の日本におけるキリスト教迫害事件を扱ったごく珍しい現代小説という点などで批評界の関心を集めた。高い文学的完成度と独特な文化史的価値が認められるこの作品に対する文壇の好評も続いている。柄谷行人はこの小説を指して、「世界文学史において類を見ないような作品である」²⁾と称揚した。その分、『ジャッカ・ドフニ』は津島の2000年代以後の作品を扱ったものの中で関連文献がもっとも多い作品でもある。その主な論を簡潔にまとめると、まず、「大切なものを収めるところ」という意味のタイトル(ジャッカ・ドフニ)に着目した川村湊³⁾は、津島がこの作品に収めようとした大切なものとして、「言葉」、「歌」、「思い出」、「愛」を挙げている。馬場徹⁴⁾はテキストに流れている越境する歌声から「記憶の身体性」を語る一方、「自分とは何か」というアイデンティティへの問いを本作を貫くテーマとして把握している。藤田護⁵⁾は、『ジャッカ・ドフニ』に用いられたアイヌの口承文芸に注目し、複数の物語を繋げたり想起させていく口承の文学と歴史が果たしている役割について論じた。最後に、長谷川啓⁶⁾は作家論的な観点とアイヌの世界観を中心に『ジャッカ・ドフニ』を概観した。先行論では主にアイヌに関わることへの関心が高く、物語の内容についての言及は「チカ(チカップ)」とテキスト現在時の主人公「わたし」に限定された傾向がある。だが、実のところ、この作品には津島文学

2) 柄谷行人 (2016.2.23.). 津島佑子さんを悼む 虐げられたものへ愛と共感 朝日新聞.

3) 川村湊 (2016). “ジャッカ・ドフニ”論：津島佑子の「大切」なもの(追悼 津島佑子：越境の想像力と『ジャッカ・ドフニ』). すばる, 38(6), 184-195.

4) 馬場徹 (2016). 越境するルル・ロロロの歌声：津島佑子『ジャッカ・ドフニ』の世界(津島佑子遺作を読む). 民主文学, 613, 84-93.

5) 藤田護 (2017). 津島佑子『ジャッカ・ドフニ 海の記憶の物語』における口承の歌と物語：不完全な記憶の中で生きていくために. SFC Journal, 17(1), 298-323.

6) 長谷川啓 (2018). 津島佑子晩年の文学：『ジャッカ・ドフニ 海の記憶の物語』を中心に. 比較メディア・女性文化研究, 1(1), 43-56.

では珍しくキリスト教的なモチーフが現れており、朝鮮人や奴隷など様々な背景の人物群が登場しているなど、議論できる内容を多量に含んでいる。本稿では「マイノリティの友情」と「共生の精神」というキーワードのもとで、先行論で見落された要素も総括的に点検し、既存の研究の隙間を埋める。本論では、チカとジュリアンはもちろんのこと、ペトロをはじめとする様々な登場人物の類型を見つめながら、越境する彼らの動態が作り上げていくものを分析したい。また、テキスト内に生成されたアイヌとキリスト教という二つの異質的集団の特徴と交差的地点を考察することで、作中のマイノリティの友情と共生の精神が示す今日的な意味を探る。

II. 作品の構造と語り

複雑な作品の構成が指摘される津島の後期作では、時間的に過去と現在という大きな二つの軸の物語が併用されることが多い。テキストにおける現在と過去の主人公の物語が交互に展開される『あまりに野蛮な』(2008)と、過去の物語がテキスト現在時の主人公たちの報告という形で本筋の物語に織り込まれている『葦舟、飛んだ』(2011)ともまた異なって、『ジャッカ・ドフニ』は、一般的な入れ子構造でもなく、複数の物語が交差進行するナラティブ構造でもない独特な構成を取っている。それでは本論に入る前に、物語の流れに沿って、本作品の構造とナラティブの特徴をまず検討してみよう。

『ジャッカ・ドフニ』の始まりと終わりにおける時空間的背景は、現代の日本で、冒頭は2011年のテキスト現在時に中年を過ぎて北海道を再訪した主人公の物語、最後は彼女の若かった頃の物語となっている。そして途中には幼い息子を亡くした主人公が息子の生前に一緒に北海道を旅した時期の話が挟み込まれている。殆どのページが割かれた本作の中心になる物

語は、近世の日本と東南アジアを舞台としており、世界史的には大航海時代以降の状況を、そして日本史においては江戸幕府のキリスト教弾圧の時代を歴史の背景としている。本筋の物語の主人公はチカとジュリアンで、彼らと縁を結んだ人たちの同行の話が計三つの章で構成されている。一章は、マツマエで生まれたチカが日本の様々な地域を転々とした挙句、マカオに至るまでの過程が描かれており、二章はマカオで始まった新しい生活が語られる。三章は、マカオを離れたあと辿り着いたバタビア(今のジャカルタ)での暮らしから死が近づいた瞬間までを、ジュリアン宛てに送るチカの三通の手紙を以て伝えている。その最初の手紙はチカがマカオを離れてから9年目になる年に、そして二つ目の手紙はそれから4年後に、最後の手紙はそれからさらに30年後の時点で死を目前にしているチカの状況を知らせている。

また、一人称、二人称、三人称の語りすべてが活用されている点も見逃せない特徴といえる。二人称語りは主に現代時点での主人公の物語で用いられている。二人称語りにも多様な性質が認められるが、本作では一人称に代えてもさほど変わらない二人称、すなわち自分を指示対称とする二人称が活用されている。一人称語りは作中の現代時点のパートに少し現れるのみで、使用頻度は最も少ない。一人称の語りは、テキスト内の最初と最後の場面が誰の視点から書かれたものかを仄めかす程度の役割に留まっており、現代の物語では二人称を中心にナラティブが進められている。つまり彼女が物語の主体であることは明示されているが、(内包された)読者にとって彼女は他者として想定されるのである。語り手は、一～二人称の語りと時点を移動しながら自分を相対化してみる。近世から現代に至る東アジアのマイノリティを多数登場させている本作において、これは「呼ぶ側」だった日本人を「呼ばれる側」に立たせるための試みと見られる。また、語り手が物語の主体を他者化して距離を作ってみることで、逆に物語の主体と読者との距離を縮め、読者の感情移入を容易にする効果も得てい

る。そして17世紀のチカとジュリアンの物語は三人称の視点から描かれているが、このような複数の語りと時空の変化は多様な意味産出の場として生動するテキストの現実が過去とリンクされ、作品のポリフォニー (polyphonic) を成す。

III. 運命の共同体となった近世の社会におけるマイノリティ

2008年に出版された長編『あまりに野蛮な』で植民地時代と現在の台湾と日本を行き来する物語を紡ぎ出した津島は、続く著作『黄金の夢の歌』(2010)と『葦舟、飛んだ』(2011)では北に向かい満州からシベリア、そして中央アジアまでを横断した後、再び南に目を向けるようになった。『ジャッカ・ドフニ』では、主な時間的背景を17世紀に遡り、作品の舞台を日本の最北端からマカオ、そして次第に東南アジアにまで広げている。時代の歴史的背景を強く反映しているこの物語が照らしている核心の対象は、日本によって生活の基盤が徐々に奪われたアイヌに合わせられているが、アイヌの歴史を追っていく過程で当代の日本と辺境のマイノリティをも視野に入れている。

本テキストの中心となる17世紀の物語では、それぞれ異なる背景を持つ数多くの人物が登場している。その主な登場人物を見てみよう。まず、主人公であるチカは父の存在を知らない日本とアイヌのハーフで、生まれてすぐ母親を亡くした孤児である。チカのマカオでの生活で身近な存在として共に成長してきたガスパルもチカと同様にハーフで、実父に見捨てられた上、幼くして母親を亡くした孤児である。そして、もう一人の中心人物であるジュリアンは、都の裕福な家庭の子だったが、キリスト教への弾圧が強まった時代に一族が流刑に処され、故郷を失ったまま異郷で育った。そして以後、ジュリアン・チカと運命を共にすることになる一行は、

日本内で宗教弾圧の対象となったキリスト教の信者たちだ。その中でも目を引く人物は、「ペトロ」という洗礼名を使う朝鮮人である。作者は2000年代以降の作品で、東アジア・ユーラシアにわたる様々な背景を持つ人物を作り出してきたが、朝鮮(あるいは韓国)人は現れていなかったこともあり、事実上遺作となった『ジャッカ・ドフニ』におけるペトロという人物の造形には特別な意味があると思われる。

作中の語り手はペトロが日本に渡ってきた時代の歴史的背景について少し触れている。16世紀末に日本が朝鮮を侵略した際、奴隷として捕らわれた朝鮮人の運命に関する内容が多少記されており、そこからペトロは戦争の時代に日本側の奴隷となった者と捉えられる。テキスト内で示されている年度と一致していることから把握できるように、この事件が実際に1592年から始まった文禄の役(韓国では一般的に「壬辰倭乱」と称される)を指していることは明白である。北島万次の著書⁷⁾によると、この時期に計り知れない数の朝鮮人が日本に連行されたという。その中には日本に定着することになった者もいれば、ポルトガルの商人によって奴隷としてヨーロッパに売られた者などもいたが⁸⁾、ペトロはその中で日本に住みつくようになった者の例を呈示している。無論、日本人の奴隷としてである。その他にも、途中で合流した三人の若い女性も、長崎でポルトガルの商人に奴隷として売られそうになったところで、幸い信徒に助けられ逃げることができた者たちだ。南の新しい目的地へ向かう船にチカと共に乗船した奴隷の黒人女性・イブもまた目立つ存在である。

それだけではなく、本作の現代時点の主人公である「わたし」(「あな

7) 北島万次(2002). 第6 倭乱の爪痕. 秀吉の朝鮮侵略(日本史リブレット). 東京: 山川出版社. 259.

8) 北島は歴史史料から日本で人間扱いもされなかった朝鮮人の捕虜について記述している。長崎で朝鮮人の捕虜1300人が洗礼を受けた記録、奴隷市場で売られた幼い朝鮮人のことなどが示されているが、これは本作でペトロをめぐる歴史叙述とかなり酷似している。キリスト教迫害時代の露呈とともに、徹底して歴史史料に基づいた事実的な背景の設定が行われたことが分かる例の一つである。

た」とも呼ばれる)はシングルマザーだった女性で、彼女が北海道で出会ったのも今や消えつつある日本北部の少数民族の人たち一色⁹⁾である。このように本作は近世から近代にわたるそれぞれの時代の日本と東アジアの社会的・民族的マイノリティの集合体となっている。

前節で手短かに本作の構成をまとめてみたが、『ジャッカ・ドフニ』の現代と過去の物語の間には断絶(感)があり、両者の交差性がほとんど見られないのが特徴である。しかし、これは見方を変えると、むしろ同じ民族の血統でなくても、友情の相手—テキストに現われている、見知らぬ外部者に対しても友好的だったアイヌ人たちの姿と照らし合わせてみても—になり得るという意味が込められているのではなからうか。津島の後期文学は、歴史の暗部を暴き出し、大文字の歴史叙述に及ばなかった各時代と社会のサバルタンの生を問い直す作業だったといえる。その流れをふり返ると、『あまりに野蛮な』では、物語現在の主人公リーリーが叔母であるミーチャの当時日本の植民地だった台湾での暮らしを知ろうとした。そして『葦舟、飛んだ』で、物語現在を生きる主人公たちが掘り下げようとした過去の出来事は、主に自分の家族や知人などに関わるものであった。要するに、これらの作品群では主人公たちの身近な存在の事情に焦点が当てられていた。一方、『ジャッカ・ドフニ』では作中現代時の主人公と何の関係もない過去の他者の物語が生成され、血縁と地縁そして時代と地域を越えた者たちの小歴史が結合されているといえる。

引き続き、前述した近世のマイノリティ集団が開成した共同体の性格と、彼らの生活像から発見できる有意義な事柄をもう少し見つめてみる。

兄妹のような仲になったジュリアンとチカが手をつないで旅立つ姿は、津島の2000年作『笑いオオカミ』に登場する少年少女の主人公を連想させる。他人の少年少女が荒涼とした戦後の日本社会を回る冒険に出た『笑

9) 主人公は程度の差を認めながら、自分の社会的立場を近代の少数民族に投影し、彼らが受けた社会的差別に共感する姿勢を見せている。

いオオカミ』と比べて、『ジャッカ・ドフニ』のジュリアンとチカの冒険はその移動距離と危険要素がはるかに増えているが、二人の壮大な旅程には彼らと死生を共にする者たちがいた。

ジュリアンとチカたちの一行はそれぞれ個人の信念と新たな人生の希望を求めて、マカオという遠い目的地へ向かう命がけの旅路を続ける。日本の東北から西南へ、そしてさらにマカオに向かう道上には、あらゆる危険要素が潜んでいた。気象悪化や諸々の突発事故に遭い、ジュリアンがひどく体を壊す場面もあるなど、危機の連続だった。しかし、彼らマイノリティの紐帯と精神的な支えは危機の時期により強い力を発揮する。ジュリアンとチカがマカオ行きの船に乗って航海を始めたのは、多くの人の助けがあったからこそ可能だったことであり、現地の人々の歓迎を受けながら無事に到着したマカオで彼らは新しい生活の共同体を形成し、家族のように互いに頼って暮らすことになる。マカオは多様な人種と民族が共生する上、自由な信仰生活も可能な場所で、チカはマカオに来てはじめて他の人とも言葉を交わすようになる。閉鎖的な日本との対比を通して浮き彫りにされる、当時のマカオという作中の場所(性)¹⁰⁾は、津島が志向する超国家的な空間の表象として現われる。だが、結局、そこもパラダイスではなく、階級化された社会構造の顕示と、紛争や犯罪などが繰り返し起こる、人間の醜い本性が依然として露呈される場所だった。たとえば、ある日、町の人々のための重要な文書を受け取るために港の方へ向かったチカが、多数の見知らぬ男性から性暴力を受けそうになったところ

10) マカオは作中のジュリアンと日本人の信者たちのように司祭になるための学問を遂行するため、あるいは異教を弾圧する時代に信仰生活を維持するために日本人たちが渡った場所で、ポルトガルを中心とするヨーロッパ人と中国人のほか、様々な出身の外来者が混じって暮らしており、現地の法律に従えば、マカオにいる間は外国人もほぼ同等に保護されていた。大航海時代におけるカトリックの国としてマカオに関する歴史的内容と地域的情報は次の資料を参考のこと。(アンドリュー・ユングステッド (2011-2012). マカオにおけるポルトガル人居留地とローマ・カトリック教宣教の歴史 : 外国人の繕写した濫觴の記 岡山商大論叢, 第1回と第6回)

でその一例を示しているが、そこで彼女を助けてくれたのはペトロだった。家族もいないうえ、チカと同じく日本内の民族的マイノリティだったペトロにとってチカは既に大切な存在となっていた。また、チカの兄的な存在であるジュリアンはチカが常に頼る対象だったが、後々日本に残った両親が殺されたことを知って絶叫するジュリアンを今度はチカが慰める。彼ら運命の共同体は喜びと哀しみを分かち合っており、互いの亡くした大切な人々のための哀悼の表現も繰り返されている¹¹⁾。

それにしても、実のところ、彼らはきわめて異なる者たちである。民族も価値観も生活習慣も一様ではない。海が好きで船に乗ると安らぎを感じるほど航海生活に慣れていたチカとは違って、船中にうまく適応できずに苦勞し続けたジュリアンの姿は、かなり対照的だ。これは民族も出自も相違なジュリアンとチカが、細部においてもそれ程異なっていたことを端的に呈示する一場面といえる。後に再度見ることになるが、彼らはチカとアイヌの歌を一緒に歌うにも関わらず、舌を震わせる音はチカ以外の日本出身者(ペトロも含めて)にはできないものである。このように、作中のマイノリティ同士の格別な友情で成り立っている共同体の個別主体の特殊性を浮き彫りにしており、同じ集団内においても各個人の差別化を図っていることは特記すべき点である。

IV. 西洋の宗教とアイヌの文化

キリスト教に関することが取り上げられた『ジャッカ・ドフニ』の特徴について述べた川村は、この小説を芥川龍之介と坂口安吾、そして北原白秋のキリスト教をテーマにした文学の系譜に連なるものとして位置付け

11) 物語現在の主人公も、かつての戦争で犠牲となったサハリンの少数民族のために合掌しており、そのように散在した哀悼の様は共鳴する。

ている¹²⁾。『ジャッカ・ドフニ』で、近世における日本のキリスト教迫害の時代を再現したことは文化論的に意味のある作業といえるが、日本国内のキリスト教の歴史話がこの作品の本質的な問題でないことは明らかである。上節から見てきたように、作者はあくまでも当代の不当な主権権力の野蛮性を晒す観点からこれを活用しており、物語の中心にはアイヌ¹³⁾を含む少数民族の問題がある。とはいえ、17世紀のチカとジュリアンの物語に終始一貫してキリスト教(より正確にはカトリック)と関わるものが現れているため、そこにもまた少なくない比重が置かれているのは事実であろう¹⁴⁾。それでは、津島の文学世界から『ジャッカ・ドフニ』にあらわれているキリスト教のモチーフと関連してどのようなことが言えるのだろうか。

長谷川の論文によると、津島は息子が亡くなった後、キリスト教に入信するようになったという¹⁵⁾。だが、津島のキリスト教との縁は思春期にカトリック系の女学校に入ってからすでに始まっており、加藤も指摘していること¹⁶⁾だが、初期から中期にかけて、さまざまな作品に個人的な

12) 川村湊 (2016). “ジャッカ・ドフニ”論：津島佑子の「大切」なもの(追悼 津島佑子：越境の想像力と『ジャッカ・ドフニ』). すばる, 38(6), 190-191.

13) アイヌに対する津島の関心はよく知られているが、村上のはかつての作者のエッセイと対談の資料を提示しながら、津島の父方の出身への関心と文化人類学的ブームの影響を受けたことがあいまって、すでに60年代の後半からアイヌに関心を持つようになったと述べている。(村上克尚 (2020). 動物から世界へ：津島佑子「真昼へ」におけるアイヌの自然観との共鳴. 言語社会：Gensha, 14, 113-114.)

14) 津島は本書でも歴史と文化に関する数多くの資料を参考文献として掲示しているが、そのうち近世の日本におけるキリスト教史と殉教者に対する記録、または「マカオのセミナリオ」に関する内容など、作中の時代を中心にキリスト教関連の文献が1/3以上を占めている。

15) 長谷川啓 (2018). 津島佑子晩年の文学：『ジャッカ・ドフニ 海の記憶の物語』を中心に。比較メディア・女性文化研究, 1(1), 52.

16) 初期作から2000年の『笑うオオカミ』まで、カトリックと関連を持つ津島の作品をまとめた加藤の論文を参考のこと。(加藤恵子 (2009). 津島佑子：カトリックとの葛藤(特集 現代作家と宗教(キリスト教編)). 国文学：解釈と鑑賞, 74(4), 109-115.)

体験と宗教活動に対する考え方が少々反映されている。しかし、作者の幼少期を連想させる主人公を通じてカトリックに関するものが日常の背景として登場する過去のいくつかの作品とは違って、本作ではカトリックの集団が主要人物群として登場しており、歴史とも結びついてその質を異にしていると言える。したがって、本稿では作家論的な観点よりはテキストのレベルで作者が本作でディアスポラ¹⁷⁾的な歩みを見せているキリスト教徒たちを登場させて表現しようとしたことについて論じてみたい。

歴史学者のユヴェル・ハラリは人類文明の黎明期に数百の諸宗教の一つに過ぎなかったキリスト教が世界で最も普及した宗教になるまで、その拡散過程において武力の影響は無視できないと語っている¹⁸⁾。キリスト教が帝国の時代に布教と武力を繰り返し、着実に信者を増やしていったのは事実であるが、キリスト教がローマ帝国時代以降の欧州で政治道具と制度として定着する前へ遡ると、その根源にキリスト教の独特な空間的特性を見出すことができる。悠久なディアスポラの歴史に登場するキリスト教の神は、空間より時間に沿って動く神といえる。それゆえに、キリスト教は地理と人種にとらわれない普遍性を獲得することができ、今日の歴史・神学者たちが言うように、世界の宗教として認められるようになったのである。空間を超えて様々な次元の時間に沿って流れる神の概念は、本作で形象化されているアイヌの神話「カムイ・ユカラ」にあらわれている浮遊する魂と通じるところがある。また、空間を脱・場所化して生起する、チカの心の故郷であるアイヌの地とキリスト教徒が念願する信仰的な故郷(楽園)である「天国」の心象、そして其々の超自然的存在に対する信心

17) ギリシア語の「ディアスポラ」という用語は、イスラエルを離れて異郷で暮らす離散のユダヤの民を指す言葉で、初期のキリスト教徒が異邦人の間に離散して暮らす状況の形容としても使用されるようになった。(原口尚彰 (2010). 初期ユダヤ教におけるディアスポラ. 東北学院大学キリスト教文化研究, 28, 19-20.)

18) ユヴェル・ノア・ハラリ (2018). 近い将来、「役立たず階級」が大量発生する. 未来を読む AI と格差は世界を滅ぼすか. 京都: PHP研究所, 74-75.

を鼓舞する歌—賛美歌とアイヌの歌—にも類似性が見られる。実存空間の制約を無化させる(アイヌ)歌の特性と、民族的世界観に対するチカの心理と無意識のメカニズムは次の箇所の叙述に至ってはさらに明確になっている。

チカは自分を取り巻く歌に耳を澄ませながら、ハポの歌をうたいつづける。そのように歌をうたっていると、自分が生きていくかぎり、どんな遠くの土地に行っても、歌が消えてしまうとは考えられなくなった。¹⁹⁾

しかし、歴史上では聖書の真理追求より、いつの間にか教会や聖殿などの場所(性)が重要なものとなって排他的宗教権力が形成された。そのため、派閥争いと宗教戦争は絶え間なく続いてきた。本作においても作者はカトリックの神の属性を否定しておらず、本質的な宗教の価値を認めているように思われるが、変質した宗教の様相と政治性に限っては鋭く問題化しており、批判的眼差しを向けている。キリスト教の町であるにもかかわらず、奴隷が存在するアイロニーに対するかつて日本の奴隷だったペトロの問題提起は意味深長だ。聖書の真理から外れた現実における矛盾する事象に対する指摘を、被害者の当事者性を持つ人物の視点を通じてその妥当性と有効性を確保しているのである。また、女性は聖職者になれないことに対する外部者である幼いチカから投げかけられた疑問と、宗教的教えに反する宗教争いの実状も欠かさずに盛り込んでいる。

しかし、その一方でペトロは神父に救われ、やっと奴隷の身分から免れた者でもある。そして、生まれてすぐに母親を亡くし、商売人に売られた孤児だったチカも同じく、神父や信徒たちの助けによって自由を得た者である。このように本作のキリスト教の問題においては、両面(拘束と希望)があり、制度化された権力と政治的結合/真の聖書²⁰⁾の真理と平和へ

19) 津島佑子 (2016a). ジャッカ・ドフニ. 東京: 集英社. 262.

20) チカは生涯にわたってアイヌに関する情報を追求めたが、ジュリアンにとってその対象は聖書の記録であった。本作で、筆写を経て伝えられる聖書は協力と伝承の重要性を強

の追求という相反する価値を分離させている。他者の救援者として現れ、異郷で主権権力の逼迫を受けた神父のイメージは、絶対的他者の側に寄り添い、救援の敘事を見せた歴史の中の人間イエズスの痕跡と重なり合う。

人々が日本の名を付けてくれず、蝦夷地の言葉である「チカ(チカッブ)」と呼び始めたことに大いに満足したチカは、やむをえない事情からカトリックの洗礼名を受けることになったが、その名を使い続けることを拒み、最後まで自分のアイヌの名に固執する。チカは常に自分のアイヌの血筋としての要素が消え失われるか不安に思いながら、意識的にアイヌ人として生きていこうとした。そして、ジュリアンはこのようなチカの人生の方向性を尊重する。そこで更なる力を得たチカはアイヌの歌に愛着を持って好んで歌い、常に新しい歌の発見を渴望した。にもかかわらず、周りの人々がキリスト教の神に祈る際は彼らと口を揃えて賛美歌も歌った。チカはカトリックの伝統に対しても特に拒否反応を示さないが、そこには日本のキリスト教徒集団と合流した際、洗礼名を強いず民族的アイデンティティの記号であるチカの名前をそのまま受け入れてくれた人々へのチカの配慮の念がこもっているといえる。チカはカトリック共同体の中でもたびたび賛美歌の代わりにアイヌの歌を歌っていたが、ジュリアンたちはこれに耳を傾け、チカ的情绪に共感している。また、チカと一緒に生活した(カトリック)共同体の構成員たちは、彼女のアイヌの歌を排斥せず、一緒に歌い、喜びと悲しみを分かち合う。これらの個人と集団の間で、カトリックとアイヌの伝統と精神は調和を成して混交している²¹⁾。

調する。ジュリアンたちが書き留められた文章を通じて必要な知識と情報を習得したことは、音声が中心になっていた西欧形而上学の伝統が見落とした他面を呼び覚ましており、また文字が不在するアイヌの言葉を日本の仮名を以て文字化し、テキスト上に具現することで両者は見事に相互補完している。

- 21) 参考として、アイヌとキリスト教、そして自然の音が共鳴する三人称の語り手による次の叙述部分を見てみよう。

井戸端の女たちは、それがアイヌの歌だと知らないまま、自分たちも声を添えつ

このように多数性をもつ共同体内で互いを尊重し合い、日本の歴史と文化的土台の上で西洋の唯一神宗教とアイヌの神話的世界観が平和的に共存することは、本テキストから引き出せる美徳(*arecte*)の一つである。

V. 歌と物語の力

次に、登場人物の友情の媒介ともなっている「歌」と「物語」について考えてみよう。

アイヌの言語と歌は本テキストの全体を貫き、随所に鏤められている。不思議に蘇ってくるハポの(アイヌ)歌は、チカの民族的アイデンティティを示す表象としても現れる。ところで、生まれてすぐ母と別れることになったチカが母の(アイヌの)言葉と歌ができるようになるまでには、科学的には説明できないテキスト上の超自然的な力が働いているが、チカがアイヌの歌を取り戻すまでの過程におけるジュリアンとペトロの存在も看過できない。ジュリアンがいることで、チカは言葉を発することとなり²²⁾、また、チカの脳裏と身体感覚に潜んでいたアイヌ人である母の歌の回復を導き出すのもジュリアンである。こうしてチカの口から流れ出るようになった歌が絶体絶命の危機を迎えたジュリアンに大きな力と安らぎを与えた瞬間があった。日本に残された家族が皆殺しにされる惨事が起きたことを知り、信仰に対する懐疑が引き起こるなど、激しい内的葛藤の中で苦悩するジュリアンを抱きしめながらチカはゆっくりとハポの歌を聞かせるのだった。

つ、陽気に洗濯をつづける。その歌声に、セミの声と、崖上からひびく天主堂の鐘の音も加わる。(ジャッカ・ドフニ, 231)

22) ジュリアンと別れてから長い航路を経てたどり着いたバタビアで、チカは再び言葉を失う。言葉が人間の自我を形成し世の中のあらゆる対象と関わる道具であることを考えると、ジュリアンの存在がチカの精神活動の営みに与えた影響を知ることができる。

ひとしきりに泣くと、かすれた声でジュリアンは言った。

——チカよ、わるいけど、このまんま、わし、眠ってもよいづらか。眠とうなった。

うなずき返しながら、チカは、ルルルル、ロロロロ、ととても低い声でゆっくりとうたいはじめた。

——ルルル、ロロロロロ、……アフー、アシー、アフー、……モコロ、シンタ、ランラン、……ホーチプ！ ホーチプ！

すでに眼をつむったジュリアンは微笑を口もとに浮かべ、満足そうにささやきかけた。

——ああ、モコロ・シンタの歌やな。おまえのハポの歌や。なつかしかよ。……

そして、深い海の底に沈むように、疲れきったジュリアンは眠りに落ちた。²³⁾

極度のストレスに苦しんだジュリアンは、次の夜もチカの歌を聞いてやっと深い眠りに落ちることができたが、このように彼女の歌は心理的安定と治癒の力を発揮しジュリアンの回復を手伝っている。もう一人の、チカの歌声の愛聴者だったペトロは、チカが歌を披露する場を設ける²⁴⁾。チカはマカオでの生活においてこまめに世話をしてくれたペトロから歌のリクエストがあるたびに快く応じ、ペトロもまたチカの歌から生涯の慰めを得た。最初は苦手な存在だったペトロと深い友情を築くようになったことにも、歌が媒介している。歌を通じて、彼らは故郷に帰れない者としての切ない情念を共有している。また、チカの歌はいつのまにか町中の女性たちにまで肯定的な影響を及ぼしている。マカオでチカの母親のような存在となったカタリナもチカの歌と一緒に歌いながら家族を失った悲しみを癒す。それぞれ異なる人々を繋げてくれる歌の特性は、本作では、こ

23) 津島佑子 (2016a). ジャッカ・ドフニ. 東京: 集英社, 264.

24) ペトロとジュリアンがいないバタビアでは、チカの二人の子が彼女の歌の聴者になっている。このようにチカは周りの人々の存在からアイヌの歌を保っていく動力を得るが、その分、聞き手の重要性が強調されてくる。

のように人類の普遍的な感情と情緒的な同質性を引き出すものとなっている。マカオまでチカと同行した人たちはチカの影響でアイヌの歌をともに享受したものの、チカのように舌を震わせることはできないという点は前述したとおりである。つまり、歌がもたらす肯定的な力は分有されているが、他の日本人とは区別されるアイヌの血統としてチカが持つ特性は希釈されることなく、最後まで民族的固有性として残される。

津島はかつて言葉で伝わる物語や歌が持つメッセージの時間を超越する不思議な力について語ったことがある²⁵⁾。作者の歌が持つ神秘的な力に対する追求の痕跡は、数々の前作にも見られる。『葦舟、飛んだ』で老人になった息子が子供の時母親が歌ってくれた歌を思い出す場面²⁶⁾、『黄金の夢の歌』の中のボベ君が幼い頃、大変な仕事をするたびに皆で歌を歌いながら乗り越えたキルギスの女性たちの姿²⁷⁾など、多様な主体を通して表現されてきた。『ジャッカ・ドフニ』に至っては、歌の伝播と伝承の力をさらに極大化させている。これを表すかのように、作中の主要な舞台の一つであるマカオでは、チカが去った後も依然として彼女の歌が残っている²⁸⁾。

25) マハシュウェタ・デビ、津島佑子、中沢けい (2002). 「異質さ」を肯定する文学(特集)インド女性作家との対話. 文学界, 56(12), 231.

26) 津島佑子 (2011). 葦舟、飛んだ. 東京: 毎日新聞社, 138.

27) 津島佑子 (2010). 黄金の夢の歌. 東京: 講談社, 349.

28) チカが母のアイヌの歌を日本人が主を成す村の共同体と享受し続けたことには、他者を自分と同等の存在として認め、共生を追求したアイヌの伝統的な精神が宿っている。物語現代時点の主人公がアイヌの「カムイ・ユカラ」に関して知り合いから印象深く聞いた説明を紹介する次の箇所からもこれを窺うことができる。

カムイ・ユカラは神々が自分の話をうたう、という意味だから、基本はもちろん、さまざまな神の歌なんだけど、この歌のように、人間が自分の話を語るものもあるの。クマも鳥もキツネもカエルも、そして人間も、まったく対等な神を宿していて、だからその存在も対等だってこと。和人のうたうカムイ・ユカラまである。アイヌのひとたちは和人にも神を認めているってわけ。それって、すごい発想だと思わない? (ジャッカ・ドフニ, 202, 下線は引用者)

つまり、所有欲が薄いアイヌ民族の特性に照らして、チカが去った後もアイヌの歌が人に

本テキストは末尾で物語の現在に回帰しておらず、現在と過去(17世紀のチカとジュリアンの物語)は相互接続しないことで、断絶感を漂わせている。その中で複数の時間軸の物語を横行する唯一のものはアイヌの歌である。この作品は直線的な時系列の流れを揺さぶりながら、近代に入って急速に失われたアイヌの文化的遺産と精神を彩っている。それはテキストの時空と集団を超えて人と人をつなぐ媒介道具として現れ、口承の文芸と歌が持つ神秘的な力への作者の強い信頼が明瞭に表現されている。

その他にも、ジュリアンはチカのために空所として残った過去の記憶を繋ぎ合わせる物語を綴る。その物語とは、あるキリスト教徒の青年が提供してくれた情報をもとにジュリアンの想像をつけ加えて作り上げた物語で、チカの人生ストーリーの空白を埋めているが、所々にチカのための語る側の配慮が込められている。その例の一つとして、チカの母についての事が挙げられる。アイヌ人の母が和人の男に犯されたあと、彼と共に親元を去ったことについて、青年がアイヌの規範²⁹⁾を説明しているが、ジュリアンは「つらくなるだけの想像をしても」しょうがないといい、チカの母のため、あるいは、チカのために、男についていったことをチカの母の主体的な決定としている。もう一つはチカについてのことだが、キリスト教徒が敬業の頭に代金を払ってチカを引き取ることにしたときの話の箇所、青年は敢えて金額は「誰も知らん」と付言している。金額を非公開にするのはやはりチカのための配慮として見受けられる。

こうして顕在化される歌と物語は、チカが失われたアイヌ人としてのアイデンティティの確立に寄与し、またそれはチカの生涯で大きな支えと

よって歌われたことを知らせることは、彼らとアイヌの歌を分かち合った後は、もはやチカの(母の)歌が彼女だけのものではなく、みんなのものになったことを意味するのであろう。

29) 「おなごの貞操、つまり男女のつながりをえぞ人は非常に重く考えるというぞ、男に乱暴されただけでも、もう、そのおなごは両親のもとにはいられなくなるらしい」(ジャッカ・ドフニ, 74)

なる。ジュリアンの物語がチカの生涯においてどれだけ大きな支えになったかは、チカがジュリアン宛てに綴った最後の手紙に込められた次の文章からも確認できる。

兄しゃまがかたってくれたんは、はんぶんいじょう、そのばでおもいついた、口から出まかせのはなしじゃったのかもしれんけど、チカップはそのはなしにすがつて、いまにいたるまでいきつづけてきました。

兄しゃまのはなしが、すべて、げんじつの手ざわりをともなって、ハポの顔にせよ、声、からだにせよ、あい色の海に雪がたえまなくふりつづけるマツマエのふうけいにせよ、そしてアキタのおやかたにせよ、このチカップを、そしてレラとヤキ、ラムの三人の子の命をもささえてくれとるんや。³⁰⁾

告白体になっているこの文章が含まれている最後の三通の手紙についても少し考えてみよう。バタビアに渡ってからチカに起きたことは、手紙という形式を取った物語として現れている。ところで、実際にこの手紙を書いたのはチカではない。作中では、手紙が書けない状況のチカのために誰かが代筆を受け持っている。そして、この代筆者はチカが発した言葉をただ書き取るだけにとどまらず、チカが伝えきれなかった(手紙から抜けていたり、あるいは苦しくて話せなかった)内容を自ら補いながら積極的な参加者となっている。

チカがジュリアンと遭遇する前のチカを巡る一連の事柄は、ジュリアンのもとよりチカさえ知らないことだらけで、その認識の空白はジュリアンの推測と仮定で埋められている。ところが、ジュリアンが作り出したこの話の部分もある程度は事実に基づいており、そこには助力者として、先ほども少し言及した、ある青年の存在がある。タカオカで出会ったキリスト教徒の青年が、幼かったチカは覚えておらずジュリアンも知ら

30) 津島佑子 (2016a). ジャッカ・ドフニ. 東京: 集英社. 382.

なかったその時代のチカと関連のある幅広い情報を提供しているのである。最後に位置している手紙の代筆者と同様、彼の直接的な声も出現しており臨場感を醸し出している。幼児期の記憶がないチカのために、ジュリアンがチカの子供の頃の物語を彼女と一緒に創り上げており、年を取ったチカが死に近づいている後半では、身近な現地の人々が代筆者となってチカの手紙に収めきれなかった内容を補完している点が際立つが、このようにチカの物語は(血縁や地縁などと無関係の)他人の多面的で実践的な助力によってはじめて完成されている。

VI. 別離の美学

ミン国の新しい指針にしたがって、マカオの総督が外国人の居住を制限してから平和だった日本人のコミュニティは一変することになる。もはやマカオに滞在できなくなった彼らは、それぞれ新しい生活の場を求めて旅立つ計画を立てる。共同体の解体と構成員間の別れは新しい関係の結合を生み出してもいる。ペトロはカタリナと、そしてトマスはマリアと新たな縁を結んで、それぞれマニラとゴアに行くことを決める。ここで際立つのは、カタリナは未亡人で、マリアは他の男の妻だったということだが、未婚のペトロとトマスは傷のある女性と夫婦になることで新しい家庭を築くことにしたという点だ³¹⁾。そのうえ、ペトロはカタリナの息

31) ここで、離婚をした女性も再婚が受け入れられるような社会を夢見た津島の思いが込められているエッセイを参考にみよう。母親になった女性が離婚した後も自由に恋愛や妊娠をしてもいいのではないかという問いを日本社会に投げかけたのが、初期の代表作『寵児』(1978)だった。津島はかつて、離婚した女性が恋愛をしたり妊娠をしたりすれば不道德なものと思なされた社会の雰囲気を指摘している(津島佑子(2016b). 夢の歌から. 東京: インスクリプト, 65.). 17世紀の物語をテキストの中心に置く本作でも、このような作者の願望を表すように、ペトロとトマスは結婚歴(あるいは他の男性との関係)のある女性の過去を問題視せず、夫と死別したり非倫理的な男性の振る舞いに悩まされた彼女たちの痛み

子・アントニオはもとより、チカまでも連れて行って面倒を見る強い意志を示した。彼らは津島文学の理想的な男性像として現れているといえるが、新しい世界への移動は彼らの人間関係において社会の規範と制度からの逸脱を可能にしている。

ジュリアンは妹同様のチカとマカオに残ることを切望し、唯一の方法としてチカが尼寺に入れるように取り計らった。しかし、チカは結局この案を拒否してしまう。

ジュリアンは自分の膝のうで、両手をしきりに揉み、溜息をついた。少しだけ、ジュリアンのほうにチカは身を寄せた。ジュリアンの手がこちらに伸びてきて、チカの体を抱きしめてくれたら。そうしたら、ちかはむかしのよう、ジュリアンの胸に顔を押しつけて、思いきり泣くことができるのに。チカはジュリアンに言いたかった。おらといっしょにどこかに逃げよう。どこに行くんでも、おらの兄しゃまがいっしょならこわくなか。そいで、おらとふたりできりしたんとして生きていこう。けれど、ジュリアンにそのようなことばを向けることはできない。チカにはそれもよくわかっていた。ジュリアンはチカのために生きるのではなく、デウスさまのために、ニホンのきりしたんのために生きなければならない。それがジュリアンに与えられた使命なのだから。³²⁾

実のところ、チカは誰よりも実兄のような存在だったジュリアンと離れるのが嫌だった。しかし、ジュリアンには勉強と修行に励んで、神父になるという目標があり、その後は再び日本に戻り、潜伏キリシタン³³⁾のために働かなければならなかった。これは日本のキリスト教共同体の願いでもあり、それを望む多くの人々の助けを受け、ジュリアンは無事に

(傷)に寄り添うのである。

32) 津島佑子 (2016a). ジャッカ・ドフニ. 東京: 集英社, 317-318.

33) 「潜伏キリシタン」とは、キリスト教が禁じられていた時代の日本で密かに信仰を持ち続けた人々を指す言葉である(黒木雅子 (2018). キリスト教の越境と変容 長崎・熊本の潜伏キリシタンをたずねて. 人間文化研究, 41, 32.)

マカオまで辿り着き、セミナリオに入ることができたのである。彼らへの恩返しもあり、親の影響もあったが、何よりジュリアンが自ら望んだことだった。ジュリアンはこれを自分の人生の使命と受け止めており、長年ジュリアンをもっとも身近なところから見守ってきたチカが、誰よりもよく知っていることでもあった。

チカにはジュリアンの胸の奥で、どんな思いが点滅しているのか、自分の胸のなかよりもはっきり見えるような気がした。たぶん、ジュリアンもチカの胸のなかがよく見えているのだろう。だからこそ、ジュリアンも、チカも、たがいの悲しみを避けるにはどうしたらいいのだろう、と悩まずにいられない。³⁴⁾

上記の引用文からも分かるように、彼らは互いをあまりにも深く理解しており、これが逆説的に彼らの別れを決定付ける原因となった。言い換えれば、彼らが離別を選択する心理的メカニズムになっているといえる。

チカがジュリアンに別れを告げて振り返りもせず、ガスパルと村に走って帰った瞬間から語り手はジュリアンの反応を捉えていない。実は、ジュリアンは周りに知らせて最後までチカを止めることができたはずである。しかし、そうしなかったという点で、チカの世界を誰よりもよく理解しているジュリアンがチカの選択を受け入れたように思われる。最後に、チカがマカオを発つ決心を固めた重要な心理的要因を探ってみよう。

入り江を出れば、大きな海がひろがる。光に充ちた海が、チカを待ち受けている。陸を離れ、どこまでもつづく海に身をゆだねる、その不安さえ、チカの胸を躍らせた。やっと狭苦しいマカオを離れ、海に戻るとき

34) 津島佑子 (2016a). ジャッカ・ドフニ. 東京: 集英社, 328.

が来た。マカウに愛着を感じていたはずなのに、今、船を目の前に見ると、そんな思いになった。チカは、そうした自分にとまどいつつも、海に出る喜びをおさえることはできなかった。³⁵⁾

それまでは抑えてきたが、海に出る楽しみは結局、チカには諦められないことであった。海を前にしてチカの喜びが表出されているが³⁶⁾、それが示しているのは、自由への渴望にほかならない。母が名付けてくれた「チカップ=鳥」のように生きようとし³⁷⁾、それが海を媒介にして自由な移動への志向として顕れたのである。

前の引用文で見たように、チカもジュリアンを強く説き伏せて彼の心を揺り動かすことができたはずである。しかし、彼女はそうすることはなく、互いの道を歩むことにする。それがどれほどつらい選択だったかは後のチカの手紙からも窺える。にもかかわらず、彼らは互いの大切な価値を守るために別れを選ばざるを得なかったのだ。その価値とは、個人のアイデンティティに関わるものであり、彼らの存在理由だったからである。そして、これはより強い力を動員して他者のアイデンティティを傷つけたり、文化的な価値を貶めてきた近代の政治的権力と対極にある精神と言える。

35) 津島佑子 (2016a). ジャッカ・ドフニ. 東京: 集英社, 359.

36) 本作で海は多くのことを表象している。何よりも大自然の前で無力な人間を想起させ、人間を謙虚にする空間だ。とすれば、なぜチカはそんなに海が好きになったのだろうか。海は固定化されず常に変化し、国家的境界のない場所であり、多様な移動のためのルートになる。また、親元を離れて身動きがとれない状態になったチカの母は、チカを懐に抱き、海岸から海を眺めながら歌を歌ったりしたことが示されているが、そこから、無意識の領域でチカの母への思いが働いたと思われる。

37) バタビアでチカが鳥の巣のように作った所で過ごしたのは、これに対する懇望を象徴的に示している。

Ⅶ. 終わりに

本稿では「マイノリティの友情」と「共生の精神」をキーワードに、『ジャッカ・ドフニ』のテキストから読み取れる他者性と複数性への価値肯定が作り上げた、それぞれ異なるマイノリティの主体と異質的な文化の共存の有り様を分析しながら、その意味を探ってみた。

本作の登場人物たちは広域を移動しながら、異郷で仕事をしたり家庭を築いたりして新しい空間での生活を始める。神父を目指す日本人のジュリアンはマカオに残留し³⁸⁾、その他の一行はインドネシアやフィリピン、インドのゴアなどの地域に散らばる。日本とアイヌのハーフであるチカは、早くから故郷を離れており、やっと辿り着いたマカオからまたもバタビアに移り、そこで一生を過ごすことになる。彼女はまたハーフの人と結婚して子供を産むが、その(日本と他民族の血を共に持っている)子供たちを再び日本に送る。越境の観点からみると、複雑な民族的アイデンティティを持つ彼らが母親の故郷である日本(より正確にはアイヌの地)に潜り込んで、そこで根付くという展開は、歴史上の移住/混血が成されたルートの一例を呈示するものではないかと考える。そうすることで、単一民族神話の虚像を剥がそうとするのである。本稿では主な人物群の一人であるペトロについても詳しく見てきたが、戦争の捕虜として日本での暮らしを余儀なくされたペトロのような朝鮮人の歴史的痕跡が重要な理由も、強制移住された朝鮮人の実状から日本内の少数の他民族が流入した経緯を知らせているという点にある。

前作の『ヤマネコ・ドーム』(2013)では放射能に汚染された日本が物語現在の背景として描かれているが、『ジャッカ・ドフニ』の冒頭でも東日本大震災後の状況が暗示されている。東日本大震災の直後、国民を結束さ

38) チカの最後の手紙からは、ジュリアンがその後、再び日本へ戻り、自分の懇望通りに殉教を果たした可能性が暗示されている。

せるために内部的一体性を強調するネオナショナリズムの危険性が浮上した日本の近況と関連付けて考えてみると、当代のマイノリティの集合体を描き、他民族と他宗教など、異質な他者との友情や共生の精神を謳う『ジャッカ・ドフニ』は、その対抗物語(Counter-narrative)として読むことができるであろう。

ジュリアンとチカは人生の同伴者として、互いを真の兄妹のように支え合いながら暮らした。しかし、運命の瀬戸際で結局それぞれ別の道を選んだことで、永の別れを遂げてしまう。それにも拘わらず、この結末が強い悲劇性を帯びていないのは、その離別が互いのアイデンティティと信念一つまり、個人の存在理由一を守るための決定だったからである。このように、本作では個人の問題においても、ある個の価値が他のものに包摂されず、個々の人間の自発性と固有性が確保される。そして、それは次第に集団と民族の問題にも広がる。

最後に、現代社会においてますます影響力を失いつつある宗教と消失されていく少数民族の口承文芸ではあるが、本作ではその宗教的・神話的価値も認められている。ジュリアンたちがリスクの高い航海で生き残ったのも、(作中のキリスト教徒の信仰に基づく)神の加護でありうるし、チカが奇跡的にアイヌ民族の歌を歌えるようになったのも、(集団無意識を極大化した)神話的想像力が働いたシャーマニズム的マジックともいえる。

作中、アイヌ人のアイデンティティを持つチカとキリスト教徒たちは互いの歌を一緒に歌い、それぞれの伝統と精神を排除せずに抱擁し合う。これは異なる人々の間で価値超越的な友情を築く重要な要因となっており、このように相違な背景と世界観に対する尊重と共存は、他民族と国家そして宗教に対する嫌悪と排斥が激しくなっている今日の国際情勢³⁹⁾と社

39) 周知のことであるが、近年になって各国で境と難民の問題が深刻化している。作者津島にも大きな衝撃を与えた事件である9・11テロ以降、世界は国境がバリア化され閉じたシ

会像に照らして深甚な省察の機会を提供する。また、作者の立場から見れば、カトリックに入信した信者であり、持続的にアイヌを含む少数民族に対する格別な関心を表明してきた津島が、人生の最後期にアイヌと交わした友情⁴⁰⁾の証であり、現代を生きてきた日本人として、今日ほとんど消えてしまったアイヌの伝統に向けて捧げる献花のような作品ともいえよう。

【주제어】 쓰시마 유코, 자카 도프니, 마이너리티, 우정, 공생

ステムへ向かうことになるが、このようなグローバル規模の現象をP.Andreasなどは「国境の復権(globalbordersbackin)」と呼んでいる。これに関連して、国境が復元されていく国際社会像を巡る諸問題における議論は次の資料を参照できる。(川久保文紀 (2019). 国境の壁とテイクポリティクス. 現代思想, 47(5), 112-123.)

- 40) 作者はアイヌに関するものを、単に新しい作品の素材として活用するために採ったのではない。津島は海外にアイヌの口承文芸を紹介し、翻訳作業をするなど、アイヌの文化を世界に知らせるための活動をしてきた。『ジャッカ・ドフニ』は、長い間北方の少数民族と友好的に交流し、彼らの文化を守るための実践的行動を見せてきた作者の努力が実を結んだ成果でもある。

[参考文献]

- アンドリュー・ユングステッド (2011). マカオにおけるポルトガル人居留地とローマ・カトリック教宣教の歴史 : 外国人の繕写した濫觴の記. 岡山商大論叢, 46(3), 79-116.
- アンドリュー・ユングステッド (2012). マカオにおけるポルトガル人居留地とローマ・カトリック教宣教の歴史 : 外国人の繕写した濫觴の記. 岡山商大論叢, 47(2), 165-186.
- 加藤恵子 (2009). 津島佑子: カトリックとの葛藤(特集 現代作家と宗教(キリスト教編)). 国文学: 解釈と鑑賞, 74(4), 109-115.
- 柄谷行人 (2016.2.23). 津島佑子さんを悼む 虐げられたものへ愛と共感. 朝日新聞.
- 川久保文紀 (2019). 国境の壁とテイコポリティクス. 現代思想, 47(5), 112-123.
- 川村湊 (2016). “ジャッカ・ドフニ”論: 津島佑子の「大切」なもの(追悼 津島佑子: 越境の想像力と『ジャッカ・ドフニ』). すばる, 38(6), 184-195.
- 北島万次 (2002). 秀吉の朝鮮侵略(日本史リブレット). 東京: 山川出版社.
- 黒木雅子 (2018). キリスト教の越境と変容 長崎・熊本の潜伏キリシタンをたずねて. 人間文化研究, 41, 29-45.
- 津島佑子 (2000). 笑いオオカミ. 東京: 新潮社.
- 津島佑子 (2008). あまりに野蛮な. 東京: 講談社.
- 津島佑子 (2010). 黄金の夢の歌. 東京: 講談社.
- 津島佑子 (2011). 葦舟、飛んだ. 東京: 毎日新聞社.
- 津島佑子 (2013). ヤマネコ・ドーム. 東京: 講談社.
- 津島佑子 (2016a). ジャッカ・ドフニ 海の記憶の物語. 東京: 集英社.
- 津島佑子 (2016b). 夢の歌から. 東京: インスクリプト.
- ジャレド・ダイヤモンド, ユヴァル・ノア・ハラリ, リンダ・グラットン, ダニエル・コーエン, ニック・ポストロム, ウィリアム・J・バリー, ネル・アーヴィン・ペインター, ジョーン・C・ウィリアムズ (2018). 未来を読む AIと格差は世界を減ぼすか. 京都: PHP研究所.
- 長谷川啓 (2018). 津島佑子晩年の文学: 『ジャッカ・ドフニ 海の記憶の物語』を中心に. 比較メディア・女性文化研究, 1(1), 43-56.
- 原口尚彰 (2016). 初期ユダヤ教におけるディアスポラ. 東北学院大学キリスト教文化研究, 28, 19-42.
- 馬場徹 (2016). 越境するルル・ロロロの歌声: 津島佑子『ジャッカ・ドフニ』の世界

(津島佑子遺作を読む). 民主文学, 613, 84-93.

藤田護(2017). 津島佑子『ジャッカ・ドフニ 海の記憶の物語』における口承の歌と物語
: 不完全な記憶の中で生きていくために. SFC Journal, 17(1), 298-323.

マハシュウエタ・デビ, 津島佑子, 中沢けい(2002). 「異質さ」を肯定する文学(<特集>イ
ンド女性作家との対話). 文学界, 56(12), 222-241.

村上克尚(2020). 動物から世界へ: 津島佑子「真昼へ」におけるアイヌの自然観との共
鳴. 言語社会: Gensha, 14, 112-128.

[국문초록]

본고에서는 쓰시마 유코의 최후기 역작인 『자카 도프니 - 바다의 기억 이야기』 속 다양한 배경을 지닌 등장인물의 유형을 살펴봄에 월경(越境)하는 그들의 동태가 만들어가는 것들에 대해 고찰해 보았다. 또한 작품 속에 나타난 ‘아이누’와 ‘기독교’라는 서로 다른 집단의 특성과 교차성을 분석하며 작중 마이너리티의 우정과 공생의 정신을 통해 표현되는 이 작품의 현재적 의미를 짚어보고자 하였다.

쓰시마는 『자카 도프니』에서 일본에 의해 삶의 기반을 잃어버린 아이누를 포함한 북방의 소수민족을 중심으로 조선인과 흑인 노예 등 여러 시대에 걸친 일본과 동아시아의 사회적·민족적 마이너리티의 삶을 다루고 있다. 저마다 인생의 희망과 개인의 신념을 쫓아 목숨을 건 여정에 나선 이들은 서로를 의지하며 운명의 공동체를 형성하는데, 그러면서도 개별 주체의 특수성과 고유성은 지켜지고 있다. 이들은 서로의 문화와 정신을 배척하지 않으며, 그럼으로써 ‘아이누’와 ‘기독교’라는 두 이질적 집단의 전통과 세계관은 조화롭게 상호 공존한다. 텍스트의 전반에 걸쳐 채색되고 있는 아이누의 노래는 치카(チカ)의 정체성을 확인시켜 주는 기호이자 타인과의 우정의 매개가 되고 있으며, 공백으로 남을 뻔했던 그녀의 인생 이야기는 주변인의 적극적이고 실천적인 도움에 의해 소생한다.

근대 변경의 마이너리티를 그리며 이질적 타자와의 우정의 가치와 공생의 정신을 노래한 『자카 도프니』는 타집단에 대한 배척과 혐오가 낱알이 심해져 가는 오늘날의 국제 사회상에 비춰 깊은 성찰의 기회를 제공하는 텍스트라고 할 수 있다.

[Abstract]

A Study of Tsushima Yuko's *Jakka Dofuni - the Story of Memories of the Sea*

– The friendships of minorities and the polyphony of symbiosis

Jo, Young-joon (Nagoya University)

This study examines the types of characters with various backgrounds who appear in Tsushima's novel, *Jakka Dofuni*, and analyzes those who cross the border and what their dynamic state depicts. In addition, it attempts to examine the characteristics and intersection of different groups such as the Ainu and Christians, and explore the present meaning of this work, expressed through the friendships of minorities and the spirit of symbiosis.

In this work, Tsushima deals with the lives of social and ethnic minorities in East Asia, such as Koreans and black slaves, over various periods, centered on minority ethnic groups in the north, including the Ainu, whose lives have been lost by Japan. Each of them is on a journey, risking their lives in pursuit of their hopes in life and individual beliefs, and relies on each other to form a community of destiny, and at the same time, the specificity and ethnic uniqueness of individual subjects are secured. They do not reject each other's culture and spirit, so that the traditions and worldviews of the two disparate groups, the Ainu and Christians, coexist peacefully and in harmony. The Ainu's songs that appear throughout the text are a sign that confirms Chikka's identity and serve as a medium for friendship with others, and the story of her life, which was almost left blank, is reproduced with the active and practical help of her surroundings.

It can be said that *Jakka Dofuni*, which expressed the value of friendship and the spirit of symbiosis with heterogeneous others, depicting the changes of minorities in the modern era, is a text that provides an opportunity for deep reflection in the light of today's international society, where the rejection and hatred of other groups is growing.

[Keywords] Tsushima Yuko, *Jakka Dofuni*, minority, friendship, symbiosis

논문투고일: 2021.3.29 / 논문심사일: 2021.4.14 / 게재확정일: 2021.4.22.

【저자연락처】 jo_youngjoon@j.mbox.nagoya-u.ac.jp